

領民を幸福にすることこそ



一八四九（嘉永二）年、四十五歳の山田方谷は、備中松山藩の元締役兼吟味役に命じられます。今で言えば、財務大臣で藩財政の最高責任者です。しかし、

備中松山藩は、小さな藩で貧乏のどん底で倒産寸前でした。

藩主板倉勝静は、寛政の改革で知られる松平定信の孫で、前藩主板倉勝職に

跡取りがなかったために一八四二（天保十三年）、伊勢桑名藩から婿養子に入ります。



山田方谷

勝静はいつか祖父のように老中になって日本を動かしたいという野心がありましたが、幕府の要職に就くための費用は藩からの持ち出しであったため、貧乏のどん底にあったは、藩政改革以外に

自分の夢を実現する方法はなかったのです。そこで勝静と師弟関係にあり、藩校有終館の学頭（校長）であった山田方谷を指名したのです。人生五十年の当時、世襲の有力な武士でもなかった方谷は、青天の霹靂（せいれき）といって固辞します。また、方谷が抜擢されたことに対して家臣たちからの怒りや反発もありました。しかし、若き藩主勝静の熱意に打たれて、方谷は就任することを受諾しました。

勝静は、方谷が、多才な能力、言行一致の筋を通す強い意志、内に秘めた激しい感情の持ち主であることを見抜いていました。藩政改革を断行するには、方谷しかないという見定め、自らの人生を彼に賭けたのです。

江戸時代の藩政改革は、古い習慣や制度を打破し、新しい改革案を打ち出そうとして、強い抵抗や反発がありました。方谷の改革もたいへん困難な挑戦ではありましたが、藩主勝静の厚い信任を得て、矢継ぎ早に改革を進めました。また、方谷は、武家出身でない門下生の進鴻溪、三島中洲、林富太郎等の人材を積極的に登用し、彼らを指導しながら改革を着実に実行していきました。備中松山藩は、藩校の有終館をはじめ、私塾や教諭所、学問所において人材育成を行うなど教育藩として知られ、庶民の教育レベルが向上することにより、身分を越えて理念を共有する人材がありました。方谷には、若い頃から大切にしてきた精神がありました。それは、「至誠惻怛」（至誠を尽くし人を思いやる心）と「士民撫育」（すべては藩民のために）の精神でした。方谷は、改革の目的を藩財政の再建という小さな目標でなく、領民を幸福にするという大きな目標においていました。領民の幸福を忘れて、藩財政の収支や借金の返済ばかりにとらわれていると改革は果たせないと考えていたのです。

この改革の成果は広く知れ渡り、方谷のもとには、教えを請う人たちが全国各地から訪ねてきました。越後長岡藩の河井継之助もその一人でした。継之助は、備中松山藩の御茶屋に仮住まいして、方谷に学ぶとともに方谷の弟子たちと交流しました。継之助は、方谷の教えにいたく感動し、心に刻みしました。別れの際、方谷は継之助に「目の前のことにとらわれて、本質を見落としていないか、新しい時代（状況）に合った判断であ



板倉勝静

を著実に実行していきました。備中松山藩は、藩校の有終館をはじめ、私塾や教諭所、学問所において人材育成を行うなど教育藩として知られ、庶民の教育レベルが向上することにより、身分を越えて理念を共有する人材がありました。方谷には、若い頃から大切にしてきた精神がありました。それは、「至誠惻怛」（至誠を尽くし人を思いやる心）と「士民撫育」（すべては藩民のために）の精神でした。方谷は、改革の目的を藩財政の再建という小さな目標でなく、領民を幸福にするという大きな目標においていました。領民の幸福を忘れて、藩財政の収支や借金の返済ばかりにとらわれていると改革は果たせないと考えていたのです。



や反発がありました。方谷の改革もたいへん困難な挑戦ではありましたが、藩主勝静の厚い信任を得て、矢継ぎ早に改革を進めました。また、方谷は、武家出身でない門下生の進鴻溪、三島中洲、林富太郎等の人材を積極的に登用し、彼らを指導しながら改革を着実に実行していきました。備中松山藩は、藩校の有終館をはじめ、私塾や教諭所、学問所において人材育成を行うなど教育藩として知られ、庶民の教育レベルが向上することにより、身分を越えて理念を共有する人材がありました。方谷には、若い頃から大切にしてきた精神がありました。それは、「至誠惻怛」（至誠を尽くし人を思いやる心）と「士民撫育」（すべては藩民のために）の精神でした。方谷は、改革の目的を藩財政の再建という小さな目標でなく、領民を幸福にするという大きな目標においていました。領民の幸福を忘れて、藩財政の収支や借金の返済ばかりにとらわれていると改革は果たせないと考えていたのです。

幕末、明治の儒学者。備中松山で山田方谷に学び、松山藩に出仕した。

＊進鴻溪

幕末、明治の儒学者。備中松山で山田方谷に学び、松山藩に出仕した。

＊三島中洲

江戸時代末期から大正時代の漢学者。二松學舎大学の前身となる漢学塾二松學舎の創立者。

＊林富太郎

方谷の内意を受けて、玉島（現倉敷市）に郷学を設置することを発議。藩校有終館の助教。松山藩の藩政の刷新に当たった。

15

＊河井継之助

越後長岡藩牧野家の家臣。戊辰戦争で新政府軍を苦しめた。

20

るか、常に振り返りをしなさい。」
という言葉をおく贈りました。



びっちゅうまつやまじょう
備中松山城



しずたにがっこう ちょうかんず
閑谷学校の鳥瞰図



しずたにがっこう
閑谷学校

ほうくく 方谷は、藩主が幕府の神社奉行や老中などになることにより、それを支えるため激動の幕末・明治期を過ごします。明治政府は、敗者側であった方谷に新政府の役人として働くよう要請しますが、これを固辞し、居を移しながら塾を開き、子弟の教育に専念します。また、備前岡山藩主が庶民教育のために開いた「閑谷学校」の再建に協力しました。方谷は、七十三歳で亡くなる前年まで、閑谷学校などで多くの子弟の教育にあたりました。その思想や生き方は、多くの人に影響を与え、優秀な人材を育て、新しい時代を切り拓く力となりました。

りようみん 領民を幸福にすることこそ

文 和泉哲章
わいすみのりあき
絵 石川あぐり
いしかわ



びっちゅうまつやまはん
備中松山藩の古地図

10

5

1 考えよう

方谷はどんな思いで藩の改革を進めたのでしょうか。

2 深めよう

これからの時代を生きる時、方谷の考えや生き方で参考にしたいくとはどんなことでしょうか。

memo